

聖書：ピリピ 4：10～13

説教題：あらゆる境遇に対処する秘訣

日時：2017年5月14日（朝拝）

前回の9節まででピリピ人への勧めは終了しました。今日の10節からは結びの部分となります。パウロはここでピリピ教会からの贈り物に対する感謝を述べます。しかしただ感謝を述べる割には長いスペースが割かれています。10～20節まで11節も当てられています。彼はここで何を語っているのでしょうか。これから見るように基本はピリピ人への感謝です。しかしそれだけを言うと、パウロは物に頼っているように受け取られかねない。またこれまで不満足の中にあっただかのようにも受け取られかねない。そこでパウロはキリスト者の満足について語るのです。

まずパウロはピリピ教会からの贈り物に対する感謝を述べます。原文を見て分かることは、10節の最初にあるのは「私は喜びました」という言葉であることです。そして次に「主にあって」、そしてその次に「非常に」という言葉が続きます。つまりパウロが大いに喜んでいることがまず語られています。一体彼は何をそのように喜んだのでしょうか。それは「私のことを心配してくれるあなたがたの心が、このたびついによみがえって来た」ことでした。これは具体的にはピリピ教会からの贈り物のことを指しています。18節に「エパフロデトからあなたがたの贈り物を受けた」とあります。その贈物とは何だったのか、献金だったのか、生活物資だったのか、それともその両方だったのか、具体的には分かりません。

彼はこの贈り物について「あなたがたの心がついによみがえって来た」と言っています。このことは前回の彼らの支援から今回の彼らの支援までの間にはしばらくの期間があったことを暗示します。15～16節を見るとわかりますように、ピリピ教会はこれまでパウロを支えてくれた教会でした。しかしこのところ、しばらくは支援はなされなかった。そこである人はパウロはこの言葉によって暗に彼らを非難していたのではないかと考えます。すなわち「随分とご無沙汰だったじゃないか」と。しかしもちろんそういう意味ではないでしょう。パウロは10節後半で「あなたがたは心にかけてはいたのですが、機会がなかったのです。」と言っています。詳しい事情は書かれていないので分かりませんが、考えられる一つのことは彼らが貧しかったということです（Ⅱコリント8章）。あるいはローマの獄中にあるパウロのもとまで遣わす適当な人が用意できなかった

たということがあったのかもしれませんが。あるいは他の手紙からパウロは人々の誤解とそしりを避けるため、人々からの献金を拒否した時があったことを私たちは知ります。そのようにパウロの側で受け付けないという姿勢を取っていたからだったかもしれません。しかしその期間も過ぎて、今や受け取ることができる時期がやって来た。いずれにせよ、時が整って、ピリピ人たちのパウロに対する心遣いはこのように示されたのです。この「よみがえって来た」という言葉は「花が咲く」という意味の言葉です。すなわち時が来て一斉に咲き誇る春の花のように、ピリピ人たちのパウロに対する思いは現わされたのです。パウロはそれを見て非常に喜び、また驚き、私はとても感動したということをもまず伝えていきます。

しかしこれだけを強調すると誤解されるかもしれません。まるでパウロは物をもって喜んでいてかのように。彼の喜びは物質にかかっているかのように。今までは困っていたので、できればこれからもこのように贈り物を届けて欲しいとアピールしているかのように。そこでパウロは心からの感謝を伝えると同時に大切なことを述べます。それは「乏しいからこう言うのではない」ということです。私は今、経済的必要が満たされたから喜んでいてのではない。支援献金・支援物資がどこからかやって来るのを今か今かと首を長くして待っていたのではない。私は決してそのようなには悩まされてはいなかった。そして大切なあかしの言葉を述べます。「どんな境遇にあっても満ち足りることを私は学びました。」つまりパウロの心は、ピリピ教会からの贈り物が届く前から、すでに大いなる平安と喜びの内であったことが証しされているのです。

「どんな境遇にあっても」と彼は言いましたが、その色々な境遇のことが12節に記されます。大きく分けて二つの状態が記されています。貧しい状態と豊かな状態。飽く状態と飢える状態。富む状態と乏しい状態。私たちはどっちの状態を好むでしょうか。それはそう簡単には言えないでしょう。私たちは貧しさの中にある時、ともすると不平・不満で心が一杯になりがちです。そして自分より豊かな人を見ては妬み、つぶやき、ついには絶望してしまふ。一方で豊かさの中にあると、今度は聖書で警告されているように、富に心を奪われ、神を忘れてしまいます。神はいなくても大丈夫と間違った安心感を持ち、高ぶった歩みをしやすい。あるいは豊かな状態に達したら達したで、さらに上の人を見てもっと欲しい、もっと持たなくては満足しないと思いがちです。結局、色々持っても満たされない。ところがパウロは「私はあらゆる境遇に対処する秘訣を心得ています」と言っています。それは何でしょうか。それは13節で述べられています。「私

は、私を強くしてくださる方によって、どんなことでもできるのです。」

この 13 節の言葉は、それだけを切り取って読むと、とてつもないことを言っている言葉のように聞こえます。まるでスーパーマンのようです。私にできないことは何もない。さすがにパウロでもこれはちょっと言い過ぎではないかとも思えます。しかしどんな言葉も前後の文脈を考えに入れて理解することが大切でしょう。ここでの「どんなことでも」という言葉は、11 節の「どんな境遇にあっても」という言葉を踏まえて使われている言葉です。あるいは 12 節の「あらゆる境遇に」に対応している言葉です。つまり 13 節の「私はどんなことでもできる」というパウロの言葉は、「私はあらゆる境遇に対処できる」ということの言い換えです。「どんな状況に置かれても、そこでも十分に満ち足りて過ごすことができる」ということです。どうしてパウロはそのように生きることができるのでしょうか。

彼は「私は、私を強くしてくださる方によって」と言っています。この「よって」という言葉は、一般には「あって」と訳される言葉で、キリストとの結合関係を示す言葉です。つまりパウロは私を強くしてくださる方、キリストと結ばれていることの内に十分な慰めと力と満足とを見出し、味わっていた。これはどういうことでしょうか。キリストは私たちの罪のために十字架上で死に、復活してくださった方です。ですからこの方と結ばれている私たちの罪は今や神の御前に赦されており、神の怒りは取り去られています。そして神はキリストを復活させて下さったのですから、そのキリストと結ばれている私たちは神からのあらゆる祝福に囲まれて生きている者とされています。

しかしある人はこう言うかもしれません。今の私の状態はとてもそのような祝福の状態には思われない。なぜ神の怒りが取り去られ、祝福だけが私を包んでいるなら、今なおこのような状態にあるのか。もっと劇的に素晴らしく変わっても良いはずではないか。それとも神の祝福とはこんな程度のものなのか。やがての天国では大きな差が現れるとしても、地上でその祝福は実感できないのか、と。しかしそうではありません。キリストと結ばれている者に対して神は最も良いご計画と摂理の御手を持って導いておられます。私たちの目に良いとは思われない状況をも用いつつ、神はご自身の目から見て最高最善の方法で導いてくださっていると聖書は語っています。私たちはもちろん今の自分の状態を改善したければ、そのように取り組んで良いのです。御言葉の枠の中で、神に祈りながら、これが良いのではないかと思う取り組みをされているのです。しかし必ず

しもそれで私たちの願う通りにはいかないものです。人間的に考えれば残念な状態があり、がっかりする状況があるかもしれません。しかし聖書に、神はすべてのことを相働かせて私の益になるように導いてくださっているとあります。この「益」とは私が考えるちっぽけな、近視眼的な益ではなく、神が考える最高の、究極的な益です。私の救いの最終的完成、栄光の状態につながって行くところの益です。その益に向かって神が一切のことを用いてみわざをなしてくださっている。ですからキリストにある私たちは神の絶対的な守りの御手の中で養われているのです。人間的に苦しく、つぶやきたくなる状況があっても、それは間違いのない完全な神の御手の下にある。その最も賢く、最も清く、最も力強い神の摂理の御手に信頼して、私たちはどんな中にあっても心から安心し、喜び、満ち足りていることができるのです。

そしてキリストはご自身との交わりの中で私たちを強めてくださいます。パウロもある問題を抱えて主にそれを取り除いてくださるようにと必死に祈ったことがありました。しかし主はパウロに対して「わたしの恵みはあなたに十分である」と言われました。すなわち問題は取り去られないでなおそこにあっても、主は十分な恵みを与えて私たちを支え、その問題を乗り越えさせ、なお前進することができるように導いてくださる。私は、私を強くしてくださる方によって、どんな状況に置かれても、それらに対処し、満ち足りていることができる。キリスト者はこういう祝福に生かされているのです。

このパウロの言葉を前にして私たちが問われることは、果たして私は今、主にあって満ち足りているだろうかということでしょう。私たちの前にあるのは二つの生活の内のどちらかです。満ち足りる生活か、それとも反対に日々文句を言い、つぶやき続ける生活か。もし私たちの満足が周りの状況や環境に依存しているなら、私たちはその満足をいつかは失うこととなります。たとえばある人はスポーツをすることに特別の喜びを感じます。またある人は美味しいものを食べ歩くことに、またある人は読書することに楽しみを覚えます。しかしもし私たちの満足がこのようなものによりかかっているなら大変です。それができなくなる日がやがて来るからです。走ることができなくなり、体を思うように動かせない日が来たらどうなるでしょう。食事制限をしなければならない状態になり、大好物だったものを食べられなくなったら何の楽しみが残されているでしょう。目が悪くなって、字を見るだけで疲れるようになったらどうしたら良いでしょう。その日にもなお幸福であることができるでしょうか。そしていずれこの世とこの世のあり様は過ぎ去ります。私たちはすべての物をはぎ取られ、絶対的な孤独の中で、他の何

にも依存することができない状況で、一人で死と永遠と神とに直面しなければならなりません。それでも大丈夫でしょうか。

しかしもし状況に関わらず満ち足りる生活へと進むなら幸福です。I テモテ 6 章 6 節：「しかし、満ち足りる心を伴う敬虔こそ、大きな利益を受ける道です。」 今日満ち足りて歩むことはそれで終わりではない。それは大きな利益を受ける道です。その人はその歩みを通して、神との関係において益々祝福される。満ち足りる歩みの先にはさらに大きな祝福が用意されているのです。

最後に短く心に留めたいことは、パウロがここで私は満ち足りることを「学びました」と言っていることです。あのパウロも学んだのです。最初からできたのではなかった。生まれながら満足しやすい人だったのではなかった。彼でさえも様々な苦境を通して、周りの環境に依存せず、主にあっていつでも満ち足りるという心を培われなければなりません。ある時はそれを学び得た！とあって、また失敗することもあったでしょう。そうしてこの時の彼は「どんな境遇にあっても、私は満ち足りることを学びました」と心から言えるようにまで導かれていたのです。そう述べる彼はこの時、年を重ね、兵士が見守る中、ローマの牢獄につながれていたことを私たちは思い巡らしてみるべきでしょう。

私たちは今どうでしょう。満ち足りているのでしょうか。それともつぶやいているのでしょうか。「私をもっとこうだったら良かったのに」とか、「あの人が、周りの人が、もっとこうだったら良かったのに、・・・」と不満ばかりが心に渦巻いていることはないでしょうか。しかし周囲の状況が悪いのでもなければ、私たちが不運なのでもありません。そういう時こそ、どんな境遇にあっても満ち足りることを私たちが学ぶことができる時、いや学ぶべき時なのではないでしょうか。学ぶというプロセスなしに、それを知り得ると思ったり、訓練を経ずしていつか突然そうなるといった安易な考えを持ってはなりません。それは今日、置かれた状況の中でも満ち足りていることができるという実際の経験を通して、少しずつ私たちの内に培われて行くものです。私たちもそれぞれ、今日置かれているところで、つぶやくのではなく、満ち足りることを学ぶ生徒でありたいと思います。その積み重ねを通して、パウロのように「私はどんな境遇にあっても満ち足りることを学びました。」「私は、私を強くしてくださる方によって、どんなことでもできるのです。」と告白する者へ導かれたい。そのような歩みに聖書は祝福を宣言していま

す。それは「大きな利益を受ける道です」と。